

温かい人々に出会えたセブ島研修

国際地域学部国際地域学科3年

黒澤桂子

フィリピンは日本の南にある何千もの島々からなる島国です。それらの島々の中には世界的に有名なボラカイ、パラワンなど南の島の楽園として毎年多くの観光客を迎えている観光地もありますが、国民の多くは1



海の近くにあるコミュニティーに住む子供たち。笑い声が聞こえてきそう



おそろいの制服を着たバランガイ・ルースの小学生たち

日12.4(米換算)で生活している貧困層です。人口の3%の富裕層が何不自由ない暮らしをする中で、多くの国民はその日暮しの生活を強いられています。きつびやかな高層ホテルの周りは、トタン屋根で造られたスラム・コミュニティーが広がり、冷房の効いた大きなショッピングモールの横では、ストリート・チルドレンが今日の寝床を探してさまよっています。

動の現場を訪問して生の声を聞き、現状を体感してきました。

笑顔あふれる住民

厳しい生活目の当たり

国際地域学科の学生21人は8月27日から9月9日まで、フィリピン大学セブ校と東洋大学が共同で行った第1回セブ・ワークショップに参加しました。今回のワークショップは、東南アジアの都市部の実態にフィールドワークを通して迫り、その特性を把握することを目的としていました。プログラムの前半では、フィリピン社会の理解と都市問題に関する講義を受け、知識を整理し、後半ではセブ島のコミュニティー開発やNGO活動

ワークショップでは「地域づくり」の現実を実際に見て問題を発見し、自分たちで調査をするのが目標でした。3つのグループに分かれ、バランガイ・ルースと呼ばれる小さな集落で調査を行いました。

最初は住民たちの好きな視線を感じましたが、網目状に広がる細い路地を進んでいくと、平凡だが平和な日常生活が広がっていることが分かってきました。手ごたえのある大きな洗濯場に干してあるたくさんの洗濯物。楽しそうにくらりくわい



トタン屋根の家が密集しているバランガイ・ルース

人々、道端の古びたゲーム機で夢中になって遊ぶ子供たち。私が見ていたよりも温かい笑顔にあふれたコミュニティーでした。

しかし、現実はずいぶん厳しい。彼らが住むコミュニティーは狭い道が入り組んでいて、建物は無秩序に建てられています。家の中には暑間でも薄暗く、電気がない住居もあります。1日に使える金額は一人あたり100ペソ(1ペソ=20.2円)・500ペソの水が約20ペソです。その日食っていくのがやっとです。子供を学校に通わせたくても、断念せざるを得ない人々もいます。小学生で通学する児童もいます。学費無料の小学校ですが、年に21.3%の児童が経済的な問題で辞めていくそうです。ス

この厳しい生活を少しでも良くしていくと、バランガイ・ルースでは、NGOとコミュニティーが協力してさまざまなプログラムを実行しています。教育面では、退学者にもう一度無料で就学機会を与えるプログラム。医療面ではおなかの大きな妊婦さんへの定期診断。他にも、なんとかコミュニティーの運営資金を捻出するために、ジュエリーの空き箱を材料にバッグやリュックを作ったり、生いみをミネに分解させて腐葉土を作ったりして、販売しています。

頭と体をフルに活用して理解を深め、さらに研修中の疑問点を皆で話し合うなど、きわめて中味の濃い2週間でした。研修を経て、発展途上国としてのフィリピンではなく、彼らのすてきな人柄や生活をもっと深く知りたいと思うようになりました。

田園の学舎 まなびや

東洋大板倉キャンパス

発

~第3部 IV